

手続き反転法による「学習棄却」の効果

○ 松阪 啓子

（よこはま児童文化研究所）

KEY WORDS: ラーニング・ボックス学習法 学習者内要因 「提示-選択の手続き」反転法

1. 目的

A さんが従来の「提示-選択の手続き」に習熟すると、彼女の日常生活における友人達との柔軟な関わりを妨げることになるかもしれない。そこで「提示-選択の手続き」反転法を随時に介入させることにより、A さんにおける従来の手続きの学習棄却、すなわち、「学びほぐし」が可能かどうかを検証する。「学びほぐし」が成就されたかどうかの条件として、初発介入のために、VP13 の達成率よりも RVP13 の達成率が下がった場合に、「学びほぐし」が成就したと考える。

2. 方法

- (1) 学習者 A 女子 (30 歳代)
- (2) ワークシート

研究対象課題のワークシートは、201X 年から 202X 年の 5 年間実施した視覚的知覚課題の中から選択され、全て本研究所の学習室において、週 1 回実施した。

(3) 実施方法

(a) 提示-選択の手続き

- ① 提示時間は、瞬間提示の 0.5 秒とした。
- ② 選択取得までの遅延時間は 0.5 秒、5 秒、10 秒、20 秒そして 30 秒の 5 種に設定した。
- ③ 上記の①と②の消費時間を反転させる。

(b) 実施装置

実施装置は、研究所作成の「T1-T2-T3-T4 学習法」用のラーニングボックスを使用した。

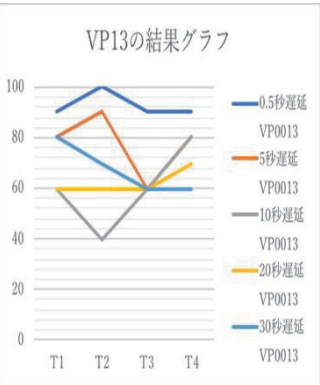
- (4) 本研究用の課題シート
視覚的知覚課題 13



3. 結果

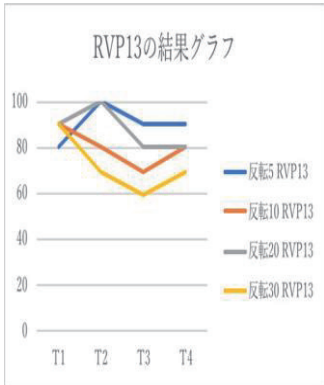
グラフ 1

マクロ（達成率）分析

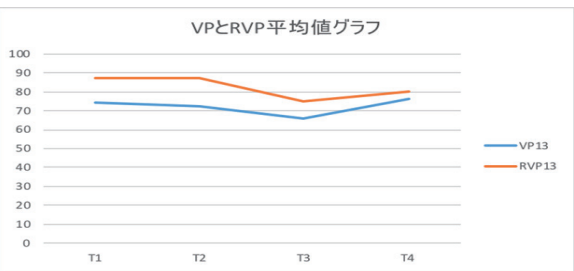


グラフ 2

RVP マクロ（達成率）分析



グラフ 3 VP と RVP の平均値グラフ



4. 考察

以下の 3 点から仮説を考察する。

- (1) 遅延時間が長いほど達成率が下がるに関して
 - (2) 刺激カードを見る時間を長くすれば、その達成率は上がるに関して
 - (3) 「学習棄却」(Unlearning) は成立したか
- (1) 遅延時間が長いほど達成率が下がるに関して
VP13 に関して、グラフ 1 マクロ（達成率）分析をみると、この仮説は成立しなかった。
- (2) 刺激カードを見る時間を長くすれば、その達成率は上がるに関して、
RVP13 に関して、グラフ 2 マクロ（達成率）分析をみると、この仮説は成立しなかった。
- (3) 「学習棄却」(Unlearning) は成立したか。
グラフ 3 VP と RVP の平均値グラフをみると、この仮説は成立しなかった。

3つの仮説が成立しなかった原因として2つ考えられる。まず、表 1 から正反応の出現は、刺激カードと選択カードとの関係を「見る」、「見ない」の 2 要因で示した場合に、双方ともに「見る」確率、すなわち正反応の確率が 1/8 である。また、表 2 から、学習者が正反応を出すためには、6 段階の記憶過程を正確に通過しなければならない。

ここから、A さんに 3 つの仮説が成就されなかった原因は、学習者外要因だけでなく、学習者内要因が深く関わっていたからではないかと考えられる。今後は学習者内要因に合致した学習者外要因を探さなければならない。

表 1 提示法

| 過程 | 情報処理過程 | 作動記憶+作動要因 |
|----|--------------------------------|-----------|
| 1 | 提示項を見て、 | 注意、知覚 |
| 2 | 見せられた提示項を記憶し、 | 記憶 |
| 3 | ラーニングボックスの上蓋を開けて、 | 保持 |
| 4 | ラーニングボックス上に置かれた3枚の選択項を見て、 | 知覚 |
| 5 | ラーニングボックス上に置かれた3枚の選択項の中から、 | 検索 |
| 6 | 提示項で見たカードを知覚表象し、 | 想起 |
| 7 | 提示項で見たカードと同じ選択項カードを見て、 | 注意、知覚 |
| 8 | それらと比較照合し、 | 知覚 |
| 9 | 提示項で見たカードと同じ選択項カードを取り、 | 知覚、行動 |
| 10 | 提示項で見たカードと同じカードを取ればいいことを知り、 | 学習1 |
| 11 | 提示項で見たカードと同じカードを取ることが引き続き起こせる。 | 学習2 |

(謝辞)

A さんとは、週 1 回 1 時間協働学習者として学習しています。また、研究所の行事では長い時間を A さんと過ごします。

A さんと過ごしていただいていた日々の学習の成果は、ご家族の了解のもと毎月のラーニングボックス研究会で発表しています。A さんの成果は研究会参加のメンバー各々の研究を深めるものです。

A さんと A さんのご家族の協力に感謝申し上げます。

Keiko Matusaka